

二三一 澆季の世に及ぶや、乃ち妖艶婀娜、以つて其の色を衒ひ、耽溺迷惑して、以つて其の慾を恣にし、怨嫉妬害して、以つて其の毒を發す。而して蠶織は識らず、桑麻は問はず、嚙嚙長舌し、職ら厲階と為る。予竊かに天下古今の治乱興亡の由来を原ぬるに未だ嘗つて此に胚胎せずんばあらざるなり。

及澆季之世也、及妖艶婀娜、以衒其色、耽溺迷惑、以恣其慾、怨嫉妬害、以發其毒、而蠶織不識、桑麻不問、嚙嚙長舌、職爲厲階、予竊原天下古今、治亂興亡之由来、未嘗不胚胎胎乎此也、

【訳】人情が薄く風俗の乱れた世の中になると、艶やかで美しく、色っぽいことがはびこり、その美しさをみせびらかすようになる。よくない事にふけり熱中して、心が迷って、欲望丸出しともなる。怨みやねたみや憎しみがいつぱいとなって、その害が始める。そして、蚕を飼って絹を織ったりするような働くことは何も知らず、蚕の餌の桑や麻などの生産のための知識についても考えようもしない。多くの人が集まって長話し、それが禍のもととなる。私が、じつくりと天下や歴史の治乱興亡の原因を調べてみると、みんなこのようなところにある。

二三二 大抵聖人の道は、平平淡淡、卒然としてこれを見るに、何の奇特かあらん。晨夕把玩し、看得透徹するに及べば、則ち最尊最勝、至理妙道、天下の言説を挙げて、本これに加ふるものあるなしを覚ゆるなり。

大抵聖人之道、平々淡々、率然見之、有何奇特、及晨夕把玩、看得透徹也、則覺最尊最勝、至理妙道、舉天下之言説、本無有加焉者也、

【訳】一般に聖人の道というものは、平々坦々としていて、少し見ると何も特別のことではない。朝夕、手に取り親しんで、奥底までのに本質を見ると、この上なく尊くすぐれている道で、世の中の言葉ではこれに付け加えることはない。

二三三 是れに由りてこれを観れば、道は本高からず卑からず、難にあらず易にあらず。世間の唯心あるの人は乃ち能く其の門に入るを許さる。

由是觀之、道本不高不卑、非難非易、世間惟許有心之人乃能入其門、

【訳】このことから聖人の道を考えてみると、聖人の道は基本的に高いものではなく低いものでもなく、難しいことではなく易しいことでもない。世間の誰でも、ただ

心がある人は、その聖人の道を求めることができる。

二三四 「大学」は即ち唐虞三代の学問の法にして、孔子はこれを伝えるものなり。

大學即唐虞三代學問之法、而孔子傳之者也、

【訳】「大學」は、伝説時代の帝王の堯(ぎよ)・舜(しゅん)の時代と夏・殷・周三代の学問の方法で、孔子がこれを伝えたものだ。

二三五 二程、表章してより以来、儒者始めて此の書を尊信す。而して其の功を用ふるの要は、全て誠意に在りて、其の手を下すの処は、乃ち格物致知に在り。

自二程表章以来、儒者始尊信此書、而其用功之要、全在誠意、而其下手之處、乃在格物致知、

【訳】二程(程顥と程頤)が「大学」を広く世間に知らしめた以降、儒者はこの書(大学)を敬い信じるようになった。それを実践するにあたって大切なことは、全て誠意にあり、最初に始めることは「格物致知」についてである。

二三六 格物致知の説は、紛紛異同、蓋し其の幾十家なるを知らず。而して朱子・王文成尤も顕著たり。

格物致知之説、紛々異同、蓋不知其幾十家、而朱子王文成尤爲顕著

【訳】格物致知の説は、入り乱れてそれぞれ異なっている。何十人もの学者が唱えている。しかし、朱子と王陽明のものもとても有名である。

二三七 朱子は格物を以つて窮理と為し、將に広く天下の物の理を窮めんとす。且く其の知至りて意誠なりの言に因るに、其の従学の初め、直外面に向かひ、死に抵るまで窮め到り、以つて其の知を極むれば、則ち自然に善に入り易しとす。其の手勢の重んずる所は浸浸然として一種の外面馳騫、支離決裂の弊を啓く。王子の説の、よりて起る所なり。

朱子以<sub>レ</sub>格物<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>窮理、將<sub>レ</sub>廣窮<sub>二</sub>天下之物理、且因<sub>レ</sub>其知至而意誠之言、其從學之初、直向<sub>二</sub>外面、抵<sub>レ</sub>死窮到、以極<sub>レ</sub>其知、則自然易入<sub>二</sub>於善、其手勢之所重、浸々然啓<sub>一</sub>一種外面馳驚、支離決裂之弊、王子之説、所<sub>レ</sub>從而起<sub>一</sub>也、

【訳】朱子は物事を極めることを大事にして、広く天下の物の道理を探ろうとした。知識を極めようとしたものは、物事の道理を明らかにすることに努めた、その学問は最初は、外の道理を死にいたるまで極めていき、極めていけば善に入ることができるとした。その門下の人々は、外側のことばかりを求め、ちりぢりになり弊害が出た。ここに王陽明の説が出てきたわけがある。

二三八 王子は一切知識見解を排して、直裏面に向いて、此の良知を討ぬ。簡易直截、直覺切実なり。然り而して学ぶ者大率自信に過ぎ、浸浸然として又猖狂自恣の病を啓く。是れ亦学ぶ者の当に慮るべき所なり。

王子一切排<sub>レ</sub>知識見解、而直向<sub>二</sub>裏面、討<sub>レ</sub>此良知、簡易直截、直覺切實、然而學者大率過<sub>二</sub>於自信、浸々然又啓<sub>レ</sub>猖狂自恣之病、是亦學者之所當慮也、

【訳】王陽明は、知識や見解を避けて、ただ内面を見つめていき、生まれつき持っている良知を求めた。単純でわかりやすく、直説にわかることだ。次第に、学ぶものが自信過剰になり勝手気ままな者が出る弊害が出た。学ぶ者は、よくよく考えなければならぬことだ。

二三九 格物の物は、則ち物に本末あるの物にして、泛然として天下の事物を指すにあらざるなり。致知の知は、則ち先後する所を知り本を知るの知にして、良知良能の知にあらざるなり。然らば則ち朱子は固より未だ得たりと為さず、而して王子も亦胥これを失ふ。

格物之物、則物有<sub>二</sub>本末<sub>一</sub>之物、而非<sub>レ</sub>泛然指<sub>二</sub>天下之事物<sub>一</sub>也、致知之知、則知<sub>二</sub>所<sub>一</sub>先後<sub>二</sub>知<sub>レ</sub>本之知、而非<sub>レ</sub>良知良能之知<sub>一</sub>也、然則朱子固未<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>得、而王子亦胥失<sub>レ</sub>之矣、

【訳】物の道理という物は、物事には本末があるという物で、漠然として世の中のいろんなできごとをさすのではない。物事を知る知は、物事には儒序があるのを知ること、すばらしいことすべてのことを知っている知ではない。そうであるなら、朱子

はまだ会得したとは言えず、王陽明もまたそうである。

二四〇 「詩經」一部三百篇、是れ人情の譜なり。

詩經一部三百篇、是人情之譜也、

【訳】詩經は三百編、人の感情を記したものだ。

二四一 人は情なき能はざるなり。此の情は敢へてこれを恣ほしいままにすれば、則ち以つて倫を斃むぶり家を敗り而して国を滅ぼすべし。善くこれを制すれば、則ち以つて神人を感じしめ風俗を化し、而して蕩蕩とうとうの治を興すべし。

人不能無情也、此情也、敢恣之、則可以斃倫敗家而滅國也、善制之、則可以感神人化風俗而興蕩々之治也、

【訳】人は感情無しにはおれない。この感情はおもむくままにすれば、人の道をはずれ、家を滅ぼし、国を滅ぼす。この感情をよく制すれば、神のように人を感じさせ、風俗をきれいにし、平らかに安らかな政治ができるだろう。

二四二 是の故に聖人はこれを疏し、これを導きて、敢へて悖もとらざるなり。これを隄ふせぎこれを防ぎて、敢へて過あやまたざるなり。然る後以つて天理を失はずして人情の正せいに就くべし。

是故聖人疏之導之、而不<sub>レ</sub>敢悖也、隄之防之、而不<sub>レ</sub>敢過也、然後可以不失<sub>二</sub>天理<sub>一</sub>而就<sub>二</sub>人情之正<sub>一</sub>矣、

【訳】だから聖人は、これを認め、これを己の中に育て、あえてさけない。これを無理に避けようとはしない。天の条理を失わず、感情が正しく用いるのだ。

二四三 人情の至りは、即ち天理の在る所。而して天理の外、復また人情もなし。天理人情は、是れ一にして是れ二なり。

人情之至者、即天理之所在、而天理之外、無復人情、天理人情、是一二、

【訳】人の感情が起こるのは、天理の範囲内である。天理の外には人の感情もない。

天理と感情は一つのものであるが、二つである。